

中澤篤史, 星野映

早稲田大学

キーワード: 運動部活動, ユーススポーツ, 対外競技基準, 戦後史

[抄録]

中学生・高校生年代の運動部活動を中心としたユーススポーツは、日本のスポーツ文化を支える土台として、戦後に大きく拡大し、多くの競技大会が開催されるようになった。しかし今日、とりわけ運動部活動で過剰なあり方が問題視されており、その引き金となる競技大会のあり方も再考が迫られている。

では、戦後から現在にかけて、競技大会はいかに展開してきたのか。とくに、多くの選手やチームが参加し日本一を決める全国競技大会は、どれくらい開催されてきたのか。これらの問いは戦後ユーススポーツの変遷を考える上で重要でありながら、先行研究で十分に取組まれていない。そこで競技大会の数やその変化を計量的に記述することで、競技システムの発展過程を追いながら、戦後ユーススポーツの歴史を見直してみたい。本研究は、1946年度から2001年度までの中学生・高校生年代の全国競技大会の展開を、各種資料を元に計量的に明らかにすることを目的とした。

分析の手続きとして、『運動年鑑』、『スポーツ年鑑』、『日本アマチュアスポーツ年鑑』など各種資料に掲載された情報を整理し、その中から中学生・高校生年代の選手を対象とした全国競技大会を抽出し、その開催状況の推移を検討した。

得られた知見は次のようにまとめられる。各種資料からは、1946年度から2001年度までに、52競技で9,029大会が開催されていたことが確認できた。時代ごとの変化を見ると、大会数は1946年度の32大会から2001年度の324大会まで、ほぼ一貫して増加し続けていた。

こうした競技大会の展開を、文部省が定めた対外競技基準の変遷と関連させて分析すると、対外競技基準の規制がそもそも十分には守られておらず、規制を上回る形で全国競技大会が開催される実態があったこと、にもかかわらず規制が緩和されてきたことで、さらに全国競技大会の増加が引き起こされたこと、そして規制の及ばない学校教育の外側で民間・地域スポーツクラブを対象に含む全国競技大会も急速に発展してきたことが明らかになった。

以上から本研究の結論として、中学生・高校生年代の全国競技大会は終戦直後から2000年頃にかけて、増加し続けてきたことを主張した。最後に、そこから引き出されるインプリケーションとして、本研究がユーススポーツの制度的発展の解明につながる意義を有している可能性、および全国競技大会の増加とは戦後ユーススポーツが高度化してきたことを意味している可能性を指摘した。

スポーツ科学研究, 19, 42-66, 2022年, 受付日:2022年4月5日, 受理日:2022年10月20日

連絡先: 中澤篤史 〒3591192 所沢市三ヶ島 2-579-15 早稲田大学スポーツ科学学術院

nakazawa.atsushi@waseda.jp